

烏森トレッキング回想記

第二十回

日 時：' 0 8 . 1 2 / 6 (土) ~ 1 2 / 7 (日)

概略行程：

1 日目 西立川駅～国営昭和記念公園～西立川駅～相模湖駅～相模湖公園～弁天島～
宿泊 / 弁天島温泉 天下茶屋

2 日目 ～千木良バス停～高尾山口～清滝ケーブル駅～高尾山駅～薬王院～高尾山～モ
ミジ台（昼食）～高尾山駅～清滝ケーブル駅～トリックアート美術館～高尾山
口

メンバー：山田、吉川、小林、磯崎

青梅線西立川駅での待合せ時間は9：30 AM集合と、いつもよりはのんびりと。

晴天下、先着は吉川、山田の両氏で、小林氏も定刻に到着。大谷氏の欠席葉書を回覧しながら、米本、大谷、森氏の欠席を伝える。

【余談56】第20回と云うことで従来の枠組みに囚われず、数泊、遠方の旅も考えたが、最終、これまで通りの計画枠に留まった。事情背景は、仕事が多忙であったのと、案作りが思っていたほど容易でなかったからで、機会があれば、改めて計画してみたい。

もう一つの理由として、ワープロに、前々回時の計画原案が残されていたことも告白しておく。

「昭和記念公園」は旧米軍立川基地で、返還を受けた後、昭和天皇在位50周年を記念して造られた国営公園である。総面積は180haで、年間入場者数は250万人以上と云われ、四季折々の花を咲かせて迎えてくれる。

【余談57】基地返還の時期や公園開園年月等は定かでないが、昭和43年頃、青梅線車内から米軍基地を眺めた記憶がある。広い芝生の庭、所々に白い建物が配置され、まさに、日本国の風景ではなく、白黒TVで見たアメリカの世界であった。

立川駅からも入れるが、最寄り駅は次駅西立川駅で、ホリデー快速も停車する拠点駅になっている。

西立川口から入場。

紅葉大樹の下に設けられた、池の畔のベンチに腰を掛けて、ここでの火熾しは可能かの

詮議に始まり、どのコースを巡るか、レンタサイクルは如何かと、いつもの様に付け焼刃の論議をし、例によって、最終的には道なりに歩くことにする。

ここでも、山田氏から樹種の解説を得るが、スケールの壮大さに加え、立派な自然林の大樹が多く、“何とも贅沢な森林公園”と感嘆する。

進む道は複雑多岐に至る所で別れ、案内看板を見ても、さっぱり見当が付かず。途中、ダイナミックな知恵の輪に出会い、しばらく奮闘するも、最後は、解答が得られないまま、尻尾を巻いて立ち去る。

初冬の陽を浴びて、銀杏の実を拾ってみたり、花見カレンダーに案内されたコウテイダリアの花を探しながら、のどかなウォーキングを楽しむが、向かう方向は一点、バーベキューガーデンへ。

管理棟に出向き、バーベキューの用具と食材を入手し、合わせてビールも調達。

広場にテーブルを立て、肉と野菜、焼きそばのオーソドックスメニューによるバーベキューを楽しむが、規制の厳しさには何とも苛立つ。

西立川駅から、一旦、立川駅に戻り、中央線を下って、相模湖駅に移動。

以前、素通りした相模湖公園に立寄るが、既に、紅葉期を終へ、枯葉を残すのみ。

相模ダムエン堤 / 筑井大橋を渡り、右手に嵐山登山口を見遣る頃には、早、日が暮れ始め、若干、気懸りになるが、弁天橋を渡って急坂を登る頃には脚元も暗くなり、メンバーからのブーイングが最高潮。

やっと、甲州街道に合流し、宿への石段を下る。

本日の宿は、日本交通公社協定の弁天島温泉「天下茶屋」。

山宿と表現するよりは、割烹旅館と云う風情で、事前にチェックしたネット情報では、好悪二つの書き込みがあり、我らと同時刻に入場した男女の動向がどうにも気に懸かる。食事は自室で。疲れたせい、メンバーの酒量は進まず、早々に就寝。

翌朝、千木良バス停から朝一番の高尾山口駅行バスに乗車。

途中、大垂水峠バス停脇に高尾山への登山口を見送るが、登山者の姿も多々有り。

京王高尾山口駅から街道脇のコンビニに入り、昼食弁当を購入。

ケーブルで山頂駅に上り、人混みをかき分け薬王院を抜けて山頂へ。余りの人の多さに落ち着く場所もなし。

山頂も同様。富士山はすっきりとした姿を見せるが、見晴らし台周辺は人で溢れ、写真を撮るのに、“お前が邪魔だ”とばかりに、手を横に振り振り、互いに人払いのし合いっこ。

もみじ台に移動し、昼食。

無論、すでに樹々は葉落し、紅葉を偲ぶ縁もないが、眼前、富士の眺望を救いとする。

眼前で、喜劇と悲劇を目撃。

中年女性二人組ハイカーの後を、高年女性二人組ハイカーが後を追ひ、“何しろ、この先の道は良く解らなくてネッ、以前、途中で引き返したこともあったんだよ、悪いけど、あんたらの後に付いて行くからネッ”

おやまあ！と驚いていると、しばらくして、高年女性二人組ハイカーが引き返してきて、“何とも、冷たいもんだよ”とプツプツ云いながら、眼の前を通り過ぎて行く。

はっきり云って、高年女性二人組ハイカーに非がある。前者にとっては楽しい山歩きに迷惑なばかりか、何かの事故があった際に云々云われた日には堪ったものではない。

後者は、先導者を見付けて出直すべきである。

山頂下の周遊道を巡る内、道に迷うが、いつの間にか薬王院に出、ケーブルで下山。

以前から一度入場したいと思っていた、駅前、「トリック・アート美術館」に入る。

眼の錯覚を利用したトリックの連続は、それなりに興味を引くが、余りの数の多さに落着いて見ることができず。

館入口に造られたテラス木テーブルに座り、サービス券でコーラを飲む。

陽が高い高尾山麓には、なお行き交う人が絶えず。